



印度の婦人

印度婦人 ミス、シング

日本國の婦人達は我國の婦人とは違ひ非常に幸福なことですがそれは全く御國の進歩の結果と思ひます、私共は階級制度や色々の弊習に束縛され、仕合なる生涯を作ることが出来ません、

印度では異階級の者は相結びて共同事業を營むこと出来ず、又子女は漸く讀書時代に成ると、無理にても嫁入を命ぜられ、本来の宿望わりとも教育を受くること出来ません、又ラマカ政治にてマホメット教を信する婦人が早婚して死ぬ迄、其家の戸外に出ることは出来ぬとしてあるから、戸外の樂は全く無きのみならず、天然物に對しては、美育や物理の觀念は閉鎖されて恰も囚人同様である。

教育の方面を申すと、今より五十年前女子の爲め大學が開かれたるが、漸く自由に入學の出来るように爲りたるは、二三十年前の事である、其學校の組織は單に高等學校でなくして、一般教育で、生徒の中には子を脊負ひて勉強する者もあり、その後寄宿舎の設けもあり、段々高等女學校の如きものも出来た、二十五年以前に印度に於て、幾らか婦人が高等教育を受けたい人が盛になりました印度の教育制度は先づ全國を五部に分ち、其一部毎に一つの大學が有り之に數多の高等學校が附屬して居る而して大學とは、教育所でなく、試験場である學位を得んと欲する者は、男女に拘はらず、志願することが出来る、試験委員は英國より來て、警官立會の上にて施行する習慣である、然るに婦人の中にも腦力強き者ありて、私の學校生徒で三百人の候補者中より學者を取り又は及第者中二三の席次を占むる者も有りたり。

今日では女子教育は一般に注意されるに至りた

るも、上流社會にて資産ある者は、左程重用視せぬは、遺憾なれども私はこれより此等の者と相謀り、女子教育振起策を講じようと思ふ。

私の學校の格言として守る所の者は「吾等は與へるが爲に受くるなり」にて即ち人の與へるが爲に享るなりと云ふ詞で此は私の學校のみならず印度一般高等教育を望む者の格言である。

(大日本婦人教育會雜誌)

●圓滿なる並に不和なる家庭の實例

高島平三郎氏

或處に母と一人の息子とが暮して居た。其息子に妻を娶つた處が、姑は嫁に對して十分の同情を寄せ、嫁も亦よく姑に事へ良人に愛敬を盡すので些の波風も立つた事がない。一日良人は薪を造ると云て樹に登り枝を伐つて居ると其枝が過つて樹下に在つた釜を破した。そこで嫁は「私放心して釜を樹の下に置いたものですから……」と言つて其粗忽を謝つて居る。又良人は良人で「マア、く頁傷をしなかつたのが何よりだ。不注意に投げ下して濟

まなかつたと……」詫びて居る、そこへ姑が出て来て「私が嫁に氣を付けて差圖をしつてやらなかつたのが悪かつた……」と言つて居る。萬事が此通りで互に思遣があるから何時も和氣藹々たる家庭を作つたといふ

或處に母と一人の子が住んでゐた。其子に妻を迎へてからはイツも家内に波風が絶えなかつた、或日夫は用事で旅をすると、自分で草鞋を作り、母は其子の看るべき衣物の袖を縫ひ、妻は其辨當を拵へると釜から飯を移してゐた、三人共中々忙がしい然るに姑はシロリと嫁がする仕事を見て居る。嫁は姑が何をしてゐるのかとチラリと見る。夫はまた嫁姑の仲の悪いのを心配して二人に心を配つて居る。三人共イツか手許が留守になつたために、夫は一丈餘りの草鞋を拵へ、嫁は飯を悉く灰の中に移し姑は衣物の袖口を皆な縫つて仕舞つたといふ(兒童研究)

